

社会問題を解決する力を育成する中学校社会科歴史授業の開発 —新選組を教材として—

B4E12042 林千穂

はじめに

本論の目的は、社会問題を解決する力を育成する中学校社会科歴史学習の授業を開発することである。教材は「新選組」とする。

初めに、今日の社会科歴史学習の現状について述べる。社会科の歴史の授業は暗記というイメージが強い。実際、今日行われている授業の多くは、教師が教科書に沿って一方的に教えているというものである。多面的に社会事象を見たり、社会事象についての見方について考えたりしている授業は少ない。そのため、生徒は歴史の授業で習った知識を無批判に受け入れ、ただ覚えているということが多い。教科書に書かれている歴史は実際に起こったことだと教科書通りに認識してしまう。このような歴史の授業が行われてきた理由を田川秀樹は「知識の習得に向けてより効率的な教授法の授業がなされてきた」からだと述べている。しかし、現在、社会は大きく変わってきている。そして時には、社会問題に対しての解決策など「答え」がでない問題もある。また、今ある職業がなくなってしまうたり、反対に新しい職業が生まれたりするなど、これからの社会の変化は激しいと言われている。「変化の激しいこれからの社会」を生き抜いて行くためには、社会の変化を受け身の形ではなく自主的に受け止める必要がある。そうすることによって、世界で起きた問題を自分事として考え、社会や自分の人生をよりよくするためにどのような行動をするべきか考えるだろう。このような「変化の激しいこれからの社会」に対応するために、『学習指導要領』も改訂がなされた。中央教育審議会の答申から『学習指導要領』における社会科の位置づけを見る。中央教育審議会の答申では社会科の目標を次のように述べている。

社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。1 地域や我が国の国土の地理的環境、現代社会の仕組みや働き、地域や我が国の歴史や伝統と文化を通して、社会生活について理解するとともに、調査や諸資料から情報を適切に調べまとめる技能を身に付けるようにする。2 社会的事象の特色や相互の関連、意味について多角的に考える力、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する力、思考・判断したことを適切に表現する力を養うようにする。3 社会的事象について、よりよい社会を考え課題を主体的に解決しようとする態度を養うとともに、多角的な考察や理解を通して涵養される地域社会に対する誇りと愛情、我が国の国土や歴史に対する愛情、地域社会の一員としての自覚、世界の国々の人々と共に生きていくことの大切さの自覚等を養うようにする。

つまり、社会科においては、自分で課題を追究したり、問題を解決したりすることが求められているのである。そのため、現在求められていることは、自分で問題に気づき、そしてその問題に対しての解決策を自分で考えることができる力である。

21世紀は変化の激しい社会と言われている。今ある職業がこの先なくなってしまうたり、反対に新しい職業が生まれたりすることも生じよう。さらにグローバル化が進めば、この先、何が起きるかわからない。したがって、生徒には自分で問題に気づき、そしてその問題に対しての解決策を自分で考えることができる力を育成しなければならない。次に歴史授業で行う理由について述べる。上述したような力を育成するに適しているのは地理や公民ではないかと言われそうである。しかし、細田裕也は子どもに主体的に未来の生き方を考えさせるための方法について次のように述べている。

子どもが、人間が時代の動きに流されているのではなく、人間が主体となり歴史を動かすのだという歴史観を身に付けることが1つの方法だろう。過去の人々が主体的に行動を起こした結果、このような現代社会がつくられてきたのであれば、未来もまた自分たちによって変えられるものであるという意識を持たせることが可能になるのである。

つまり、歴史上の人物の主体的に行動した結果を見て、自分も歴史をつくる生活をしていかなければならないと気づかせる。そして、自分たちも現代を生きる人としてどう生きべきかという意識を高める——歴史教育にはこうした力があるということである。本論はこうした歴史教育観に立ち、歴史上の人物の行動を見て、その人々はどのような問題があったのか、どのように解決したのかなどを考えて自ら問題を追究し、解決する力を養いたいと考える。現代の問題として、政治への関心が薄い、投票率の低下など様々ある。これは人々が日本について他人事として考えているということでもある。日本にある問題から子どもたちの身近にある問題までどのような問題に出会っても自分で考えて自分で問題を解決することが必要になってくる。今より更にグローバル化が進めば、外国の問題も他人事では済まされないだろう。そのため、中学校段階から自ら問題を追究し解決する力を養うことは必要である。

今回、取りあげる教材を「新選組」とする。新選組は幕府側の組織であり、戊辰戦争の敗者側になる。そして、新選組は様々な身分の人々が集まり組織されおり、百姓の身分だったのが武士になるなど、彼らは自分たちの力で未来を切り拓いていった人々だったからである。そのような点から、歴史上の人物の行動を見て、その人々はどのような問題があったのか、どのように解決したのかなどを考え、自ら問題を追究し、解決する力を育成できると考えたためである。新選組は幕府の組織でありながら、武士以外の身分の人々も刀を持ち、幕府のために戦っていた。新選組の幹部であった近藤勇、土方歳三などは、もとの身分が武士ではない。土方歳三は多摩の百姓出身。そして近藤勇は農民の出で、剣術の腕を見込まれて道場主の養子になったという人物である。また、幹部以外にも監察方にいた山崎丞は医者の子。二番組伍長だった島田魁も百姓の出身。そして美男五人衆の一人と言われていた佐々木愛次郎は、鍛職人、町人の出身である。ここからもわかるように新選組は様々な身分の人々の集まりだったのである。身分制度が固定的な世の中で、近藤勇や土方歳三は武士になることを諦めなかった。そして、最後には幕臣として取り立てられ幕府のために仕えることができた。このように新選組の人々は自分で未来を切り開き、夢を叶えたといえよう。この観点を利用して授業を開発する。新選組が出てくるのは江戸時代幕末からである。江戸時代が終わった理由は何か。徳川幕府を滅ぼさないためにはどうすればいいのかなど、子ど

もたちが徳川幕府の滅亡について追究し、解決していく授業を開発する。また土方歳三や近藤勇は武士になるという夢を諦めずに叶えた。この観点から、未来は自分で切り開いていくということに気づかせ、社会問題を主体的に考えられるようにする。

以上を踏まえて、本論では次の3つの観点を取り入れた授業プランを開発する。

- ①社会問題を解決する力を育成する歴史授業。
- ②歴史上の人物を基に自分の生き方を考えられる。
- ③新選組を教材化しているところ。

以下、本論を次のように構成する。まず、協働的課題解決学習について整理し、歴史学習の先行研究・実践の分析を行い、課題点を明らかにしたうえで、本論の目指す授業象を明確にする（第一章）。次に、一章を踏まえて授業書を活用する意義を整理し、本論の目指す授業モデルを述べる（第二章）。続いて、江戸幕府の滅亡に関する教材研究を行う。それは身分制についてのものとする（第三章）。最後に、社会問題を解決する力を育成する歴史授業の授業案を作成する（第四章）。

はじめに

第一章 歴史学習の先行研究分析

第一節 協働的課題（問題）解決学習について

第二節 分析視点

第三節 分析基準と分析結果について

第四節 本論が目指す授業像

第二章 授業書を活用した授業モデル

第一節 授業書について

第二節 本論が目指す授業モデル

第三章 教材について

第四章 授業開発

おわりに